

総会〔講演〕

## これからの公民科教育を考える

東京工業大学大学院教授 橋爪大三郎

## 1. 変容する社会の社会科(学)

はじめに、高等学校の「社会科」について、社会科学全般と関連付けてお話ししたいと思います。この部分は以前(1993年10月7日)にこの研究会でもお話ししたものです。

社会科(学)とは、「社会」についての「科学的」な研究と理解でき、その研究対象は人間の行為と行為をもたらす価値判断の集積です。それは、なぜ大切なのかその理由を考える「意味」、人間にとって大切な「価値」、していいことと悪いことを考える「ルール」などです。またその研究方法は、実証という手続きが必要な「科学」でなければならず、すべての人が承認する根拠をそなえる必要があります。事実だけではなく納得できる論理も必要なのです。ですから私は、社会科(学)教育では、科学として社会を実証できるような能力を身に付けるためにも、観察者であるよりも当事者であるという意識を与えることが必要であり、そのためには知識ではなくて実践(プラクシス)、つまり市民としての行動様式の習得を目指すことが特に大切であると考えます。

社会科の科目にはさまざまなものがありますが、歴史では過去の、地理では現在の、それぞれ社会の事実関係とその意味を考えなければならないのですが、その意味を深く考えることなく、これらの科目を単に入試のための知識の暗記に還元してしまう傾向があるように思えます。これは社会科が社会科学とは正反対に向かっている残念な傾向であると私には思えるのです。それは、「政治・経済」や「現代社会」「倫理」なども同じで、政治学や経済学、社会学や哲学などの本質に少しでも迫るような取り上げ方をされているのだろうかと考えます。とはいっても、教育現場ではさまざまな工夫が試みられているのかもしれませんが、しかし、重要で現実的なテーマほど、教えるににくいのが現実ではないでしょうか。

たとえば、戦争責任は戦後世代の「反省」や「追及」という形で教えられますが、これでは戦中、戦後生まれにかかわらず、戦前や戦中を悪と単純に考えてしまう。そのため、失敗のメカニズムからは無関係であるという、当事者意識の欠如した無責任な態度につながりかねない。憲法についても、本来は国家と人民の統治契約であるにもかかわらず、つい憲法を尊重することイコール護憲と考えてしまって、床の間に飾ってしまうような議論となる。差別の問題を考えるにしても、「差別してはいけない」と教えることによって、隠れた異質性を掘り起こし、かえって差別が再生産されることになってしまわないだろうか。国連も戦勝側の連合軍が形を変えた軍事同盟とも考えられ、集団的自衛権を肯定すること

につながらないか、などなど、当事者意識をもった市民としての行動様式を習得させるということはなかなか難しいことなのです。

## 2. 「課題追及学習」にこう取り組む

それでは、どのようにしたらよいか、ということになります。いくつかヒントになるようなことをお話ししたいと思います。

まず、具体的な事例を通し、市民としての判断を支援するために、ケース・メソッドの効用を活かすということです。たとえば、次のような問いかけをしてみるとどうでしょうか。

①憲法を否定し、政府の転覆をはかる陰謀集団が集まっている。どうしたらいい? 逮捕する根拠法は?

②あなたが結婚して子ができた。親の一方は被差別部落出身。将来その出生を子に語る?

③『ちびくろさんぼ』が絶版になることにあなたは賛成、反対?

などです。これらはどれもすぐに結論は出ないものかもしれませんが、討議を通して考えさせることは、民主主義の市民の良識を理解させるには有効であり、不完全なこの世界にどう立ち向かっていくかの良いレッスンになるとも思うのです。

生命と地球環境については、ショッキングな事例を紹介するという方法もあります。たとえば、地球上の生物の体重による動物淡白の構成比を示します。1位は牛、2位はヒト、3位はニワトリと豚など。これをみると、人間と人間が食べるものでその大部分を占め、人間のためにその大部分が消費されていることがわかります。そして、現実の問題として、炭酸ガスの増加や農地の不足と荒廃の問題が起きているわけです。つまり、人間はこうして地球にかなりの負荷をかけている。だから、地球にやさしければ人間に厳しくならざるを得ないということになります。環境問題などを論じるときに、「気休めエコロジー」とならないよう、しっかりと当事者意識をもって考えていかなければならないと思います。

家族と地域社会に関して考えさせるときには、「もし、あなたの町を除いて、日本の他の部分が消滅してしまったら、どうする?」といった問いかけを行ってみる。政府はどう創るか、食料はどう調達するかなど、民主主義社会の再生産を疑似体験してみるといった授業展開も面白いと思います。また、他にも「あなたが親だったら、子供をどう育てるか?」とか、「疑似家族をつくって役割を演技させる」といった試みも考えられます。(これについては堤・橋爪編『選択・責任・連帯の教育改革』に関連事項があります=筆者)

多文化主義とは何か考えさせる場合には、食物規制、安息日(暦)、服装、言語、習慣など世界のさまざまな文化の理解を目指す必要があります。その際には、単に「いろいろな文化がある」という知識だけでなく、それを「当然のこととして付き合うマナー」がより本質的に大切なことと理解させねばならないでしょう。(アル・グラスビー著『寛容のレシピ』を参照してください=筆者)

### 3. 価値・意思決定・言語—価値システム専攻の狙い—

それでは、ここからは私が勤務する東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻 (Department of Value and Decision Science=VALDES) についてお話ししながら、速やかで適切な意思決定の重要性について述べていきたいと思えます。(講師より後日送付していただいた同専攻のパンフレットを参照し、より具体的な記述としました=筆者)

価値システム専攻 (VALDES) は、21世紀の新しいタイプのリーダー養成の場として1996年に新たに創設されました。地球環境問題、民族・宗教・文化的対立の問題、生命倫理問題、南北問題、情報化とグローバリゼーションなど現代社会が直面するさまざまな問題は、どれもその本質を深く追及する価値判断と意思決定における卓越した能力が必要となります。また一方で、その問題に関わる多様な当事者を説得し、迅速な解決に導く意思決定のスキルも求められます。問題の深層構造を理解しない軽薄で拙速な Decision や、難解かつ細部にこだわる理想論ばかりでいつまでたっても結論が出ない Value の探求にこだわるのではなく、ダイナミズムに溢れた、新しい学問と実践の融合を創造していくことを目指しています。

そのために、VALDES は3つの理念を宣言しました。1つ目は文理の融合です。現代の諸問題は、文系だけ、理系だけといったバラバラの知識で解決できるほど単純なものではありません。宗教・文化など文系的問題と思われるものにも理系的素養が必要であり、科学技術や自然環境など理系的問題の解決にもそれを取り巻く社会構造の理解や、異なる文明ごとの人間観や自然観の違いといった文系の知が必要なのです。新しいタイプのリーダーはそれら双方に習熟していなければならないと考えます。

2つ目は数学と哲学の融合です。これは問題の数理的な把握と分析を目指す数学と、自然言語による合意形成の技術である哲学の二つのアプローチの融合です。長い学問的伝統に支えられた、人類の叡智とも言うべき深みのある観点と、数理的な手法を使った、客観的かつ厳密な現状認識の両立こそが、複雑化し、単一のアプローチでは理解不可能な現代社会を解き明かすために求められている手法であると考えます。

3つ目の理念は、学問と実践の融合です。混迷する現代社会の状況をただ後追いしたり、傍観者的に分析を行なうのではなく、積極的にコミットしていく学問と、ただやみくもに行動するのではなく、深い洞察と分析に支えられた実践が求められます。そのために、異なる分野の人々とのディスカッションを重視し、自己調和的言論に終始するのではなく、葛藤と相互理解のプロセスを繰り返す中で、真に実践的な知を生み出していくことを求めるのです。

こうした理念を実現するために、多彩な専門分野を専攻する教官が3つの講座に分かれ、相互に緊密な連絡を取りながら一体となって運営しています。それは、意思決定の前提となるさまざまな価値を理解し、体得し、創造する「価値論理講座」、社会という複雑な対象

を、数理という鋭利な武器によって攻略する「社会数理講座」、問題の価値前提と数理的構造をふまえて、実践的な解決を導く「決定過程論講座」の3つの講座です。

私は、「価値論理講座」のなかで、言説編成という分野を中心に研究しています。そこで学生に学んでほしいことは、「言葉を鍛えながら、自分を鍛える」ということです。それは、日常言語が合意形成のためのツールであり、意思決定の前提を明示するものであると考えることから、言葉を正確に、厳密に、豊かに使う技能を身に付け、「考えるように語り、語る通りに行動する」ことが非常に重要であるということです。いわば公的な場であるディスカッションのなかで、自分の感情や価値を自分の言葉で語り、それに対する他人の批判にもゆるがないという、言葉を正しく使うトレーニングをしながら、意思決定を積み重ねることで、市民としての行動様式が育っていくものと考えています。これは、先ほど述べた高等学校における社会科教育の課題を解決するためにも一つの参考になるのではないかと思います。

### 4. これからの「倫理」を考える

最後にまとめとして、これからの「倫理」教育について私の考えることをお話ししたいと思います。(竹田青嗣・橋爪大三郎『自分を活かす思想/社会を生きる思想』をご参照ください=筆者)

「倫理」を考える上で、「自由」と「ルール」、「公共性」といったことをキーワードにして考えながら話を進めたいと思います。

近代主義やマルクス主義はルールを自由な制約と考えました。今でも校則や規則を想像してもわかるように、そう考える人も多いと思います。しかし、私はまず「ルールがなければ自由はない」と考えてみることから始めてみようと思います。つまり、ルールと自由は背反しないということです。これは、言語論的転回のようにも思えますが、言葉に文法がなければ意味を伝えられないのと同じであると考えます。しかし、ここでいうルールとは、存在意義の明確な最小限のものに絞り込んで、それのみに従っていこうということです。人々は自分たちの自由を極大化するために、多様な自由や個性を受け入れる最小限のルールを自分たちで制定する民主主義という仕組みを作り上げてきたのです。そして、そのルールは権力者も含めて誰にでも適用されるという法の支配の原理が確立し、現状に不満があれば、ルールを変更できるという漸次的なステップも可能としました。また、ルールを担保するのは権力であるから、それゆえルールにもとづいた正しい権力が必要とされるのは当然ともいえます。

今までお話してきたように、ルールは人間が生きていくうえでは必要不可欠であり、ルールに従って人々が生きている社会のあり方そのものが公共的であるということです。しかし、ここで考えなければいけないのが、この公共性です。日本は明治以来戦前まで、この公共性を天皇が独占してきたため、日本人は公共性を国(官)が独占することに慣らされ

てきてしまったように思えます。しかし、官や国が公共性を独占することには大きな問題があります。それは普通の人々、つまり納税者によって支えられているということを忘れてしまう危険性があるからです。社会を構成する一人一人である市民が、市民として民主主義のプロセスとルールをわきまえながら国を監督し、自分の自由と幸せが人々に支えられ、また自分も逆に支えられているという自覚をもつこと、つまり公共感覚の本質を理解することが大切であり、ここから国家を含むそのほかの制度が始まっていくのだと思います。

倫理教育は、知識や徳目ではなく、相手の幸せは自分の幸せであるといった倫理の根源を理解し、人々が生きることの相互関係を体得することが非常に重要であると思います。

この講演要旨は、去る2002年5月24日に都立九段高等学校で行なわれた標題の講演をまとめたものです。講演をそのまま収録するように努めました。録音機器の不具合により、講演時に講師より配布された資料と後日送付された資料をもとに再構成したものです。

(文責=都立足立高校 渡辺範道)

#### 講師紹介

橋爪大三郎 (はしづめ だいさぶろう)

1949年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。執筆活動を経て、現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。専門は社会学。著書に『言語ゲームと社会理論』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『選択・責任・連帯の教育改革 完全版』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』(講談社現代新書)、『性愛論』(岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『橋爪大三郎の社会学講義』『同2』(夏目書房)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(竹田青嗣と共著 径書房)、『自分を知るための哲学入門』『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房)、『政治の教室』(PHP新書)、『寛容のレシピ』(解説・NTT出版)、『その先の日本国へ』(勁草書房)など多数がある。

平成15年度 高3学年だよ

おまけ

爽

(shuang)

平成15年9月10日 第4号

洗足学園高等学校の皆さま

6月25日に講演にうかがった、橋爪です。

そのあと、皆さんの感想文を送っていただいたので、大変に嬉しく思いました。さっそく残らず拝見しました。

日ごろ、高校生の皆さんにお話をするチャンスがないので、どういふふうに何を話せばよいのか、迷っていました。みんなが退屈して寝てしまったらどうしよう、と心配していたのはほんとうです。でも、皆さん熱心に耳を傾けてくださったので、よかったです。ありがとうございました。

戦争や宗教の話に、こんなに身近なこととして関心を持ってもらえたのは、予想外でした。そして、筋道を立てて率直に話せばちゃんと通じるのだと、勇気を持つことができました。皆さんに感謝したいと思えます。

感想文は、それぞれ思い思いに感じただままを書いてあって、どれもなるほどと読みました。小論文や小作文の練習を積んでいるせいか、パターンンミたいなものから外れたユニークな意見は特に念入りに読みました。皆さんの感想文は大事にしています。

感想文のお礼というわけでもないので、せいかくのご縁なので、私の著書を何点か洗足学園高等学校の図書館に寄贈したいと思えます。機会があったら手にとってください。

これから、皆さんにとっても大事な夏休みになると思います。皆さん一人ひとりが充実した時間を過ごされるように念願しております。

お礼にかえまして。

2003年7月22日

東京工業大学

橋爪大三郎

7月末、このお手紙と共に、橋爪先生が寄贈してくださいました5冊の著書が届きました。

若い皆さんにとって大切なことは、自分の中に鋭くなく探究心を抱き続けることです。「自分を知らりたい」、「自分が生きてゆこうとする社会を知りたい」、「自分が大学で学ぶことは社会にとってどういう意味があるのか知りたい」、そういう探究心が自分のこれからの「学び」の原動力になります。知ること、考えることは楽しい知的作業であり、読書はそれを支えてくれます。皆さんが橋爪先生の著書と出会い、わくわくするような発見をたくさんできることを願っています。本の内容を簡単に紹介しておきます。

(学年主任 木村君子)

#### 『「心」はあるのか』 橋爪大三郎著

「心」があるのは当たり前、自明のことと私たちは考えています。そして、自分の気持ちが理解してもらえない、相手が何を考えているのかわからない、と悩んだりします。でも、「心」の存在は、実はそんなに当たり前のことではない。「心」が実体として存在するのではなくて、言葉で伝えられた時間にお互いに見えるようになるものを「心」と言う。「心」は言葉の中で作られているものである、という言語の論理は明快で、読む音を惹きつけます。

#### 『世界がわかる宗教社会学入門』 橋爪大三郎著

「宗教を知らなければ、世界の人々を理解することはできません。」と、橋爪先生は講演で話されました。この本は「人類の叡智としての宗教」のエッセンスが詰まった1冊。これを読むと、世界が違って見えてきます。読みやすい、易しい言葉で書かれた入門書です。

#### 『民主主義は最高の政治制度である』 橋爪大三郎著

「思想」とは何か、「思想を生きる」とはどういうことかを教えてくれる本です。「戦後の半世紀、日本はずっと民主主義だという。信じられない。」と著者は言います。民主主義を知っているだけでは足りない。民主主義という制度を自分の手で動かすことが必要なのだ。資本主義と社会主義、国家と民族、軍隊、正義、憲法、権力、愛と結婚等、興味深いテーマを切り口に、どう考え、行動したらよいかについて指針を与えてくれます。

# 安全保障感覚 アメリカの「敏」、日本の「鈍」

橋爪大三郎  
はしづめだいさぶろう  
東京工業大学教授



九・一一の同時多発テロは、ブッシュ政権の認識を一変させた。

アルカイダのようなテロリスト・グループが、アメリカに対する脅威のリストのトップに躍り出た。アルカイダは、大量破壊兵器(核兵器・核物質、生物兵器、化学兵器)を持っていけば、躊躇なくアメリカ国民に対して使ったであろう。ここがポイントだ。アメリカの安全を保障するには、攻撃を待っているわけにはいかない。テロリストを監視し、摘発するのはむろんのこと、テロリストの手に渡りそうな大量破壊兵器を根絶しなければならない。

ブッシュ大統領は、イラク、イラン、北朝鮮を名指しして、「悪の枢軸」と呼んだ。これらの国々が、大量破壊兵器を開発しているか、開発しようとしているからだ。そして、テロリストとのつながりが疑われて

冷戦の崩壊は、こうした前提つき崩した。

アメリカ一極支配の状態が出現し、アメリカが、国際社会の安全保障に責任をもつことになった。民族紛争や宗教紛争が頻発した。イラクのような冒険主義的な国家が、戦争を起こす余地が出てきた。インドやパキスタンや北朝鮮のような国に、核兵器が拡散していった。これがポスト冷戦の世界である。

ポスト冷戦の世界については、いく通りかの見方があった。ひとつは、軍縮が進み、戦争の危険が遠のいて、平和が訪れるというもの。もうひとつは、ハンチントンが主張するように、宗教や文明を火種として新しい対立が生じるというもの。アメリカは、後者の予想に立ち、核兵器で武装する冒険主義的な国家による先制攻撃を想定して、ミサイル防衛(MD)を進めようとしていた。

相手が国家であれば、その行動は予想がつきやすい。陸軍が動員をかければ、偵察衛星から情報が入るし、武力攻撃にいたるまでにさまざまな徴候がある。外交的手段で紛争解決をはかることもできるし、攻撃

砲煙弾雨の向こうに見えるもの 十の論点

リカの一貫した姿勢と軍事力のおかげであった。米英が国際社会の主軸であることを読み損なった日本は、そこから大きな教訓を汲み取り、戦後、日米同盟を国家の基本政策としたのである。

イラク戦争後の世界は、「単独行動主義」のふるまうアメリカに、国際社会が安全保障を依存せざるをえないという、アンパランスなものとなるだろう。イラク戦争が前例となって、「ならず者国家」が新たに登場する可能性は、大幅に低くなる。いっぽう、すでに登場してしまったならず者国家は北朝鮮が、やっかいな問題として突出する。フランスにせよ、ロシアや中国にせ

いるからだ。アルカイダの根拠地となったアフガニスタンのタリバン政権が、「テロ支援国家」として打倒されたあと、イラクがつのぎの標的となったのは、ブッシュ政権にとっては、自然な流れなのである。

アフガニスタンへの進攻は、攻撃を受けたアメリカの、個別自衛権の発動だった。イラクへの先制攻撃は、攻撃を受けないための、自衛のための戦争であるという。アメリカが大量破壊兵器で攻撃される前に、「ならず者国家」を先制攻撃することは、自衛戦争であり、正当である。これが、ブッシュ・ドクトリンである。

ブッシュ政権のイラク戦争は、国際法を變更するものだ。

国際法(国際社会の秩序)は、もともと慣習法(非成文法)である。そして、大国の行動様式が変われば、それとともに変化にそなえる時間的余裕もある。

九・一一は、こうした想定をくつがえした。テロリスト・グループは、国家の正規軍ではない。その攻撃を、事前に察知することは、格段にむずかしい。予告もなしに、大量の民間人が無差別に攻撃の対象になる。そこで、テロリストに資金や大量破壊兵器や根拠地を提供しそうな国家に対して、先制攻撃を加えなければならなくなる。これが今回の、対イラク戦争である。

イラク攻撃をめぐる、国際社会は結束することができなかった。

湾岸戦争と、今回のイラク攻撃は異なっている。湾岸戦争は、ポスト冷戦時代の戦争、すなわち、イラクがクウェートを侵略した(クウェートの主権を侵害した)ことに対する反撃戦争だった。戦争目的は原状回復(クウェートの主権回復と、イラク軍の撃退)で、フセイン政権の打倒ではなかった。これは、戦争を不法とする二〇世紀の国際法にも、国連の精神にも合致していた。そこで、冷戦のあと機能を回復した国連安全保障理事会が、この戦争を正当化し、当事者となることができた。

今回のイラク攻撃は、究極的には、アメ

する。アメリカがイラク戦争を正当化すれば、それが新しい国際法になる。  
一九世紀を通じて、戦争は、主権国家の権利であった。戦争のやり方は国際法で規制されたが、戦争そのものは不法でなかった。

第一次世界大戦の悲惨な経験を踏まえて、戦争を不法とみなす考え方が有力になった。不戦条約が結ばれたが、各国は「自衛戦争の権利」を留保した。第二次世界大戦では、先に戦争を仕かけた側が、侵略戦争(不法な戦争)の責任を問われ、それに対抗した戦争は正しい戦争であるとされた。国際連合も、この考え方を踏襲している。

米ソの冷戦は、相互確証破壊、すなわち、相手国が先制攻撃を仕掛けてきても、反撃によって、相手国を確実に破壊できること(したがって、双方ともに先制攻撃を仕かけられないこと)を基本戦略としていた。「恐怖の均衡」である。この結果、核兵器は事実上使えない兵器となるいっぽう、米ソが核の傘を提供することで、周辺国が核兵器を開発する動機を抑えることができた。

リカの自衛戦争(先制攻撃)で、その目的は、フセイン政権を打倒することである。これは、二〇世紀の国際法からみれば、内政干渉であり、主権の侵害にはかならない。フランスやドイツなどのヨーロッパ諸国は、これに反対した。冷戦が終わり、ソ連(ロシア)の核の脅威が取り除かれ、アメリカに依存しなくなってきたこれらの国々は、アメリカの「単独行動主義」を非難し、牽制した。国内に大勢のイスラム教徒を抱えるロシアや中国も、アメリカに同調できなかった。だがアメリカに言わせれば、この戦争は、テロの標的となる可能性のあるすべての国々の利益になるものなのだ。国連ではなしに、アメリカに安全保障を依存している日本政府が、この戦争を支持したのは当然のことである。

拒否権によって各国が互いを牽制し、安全保障理事会が機能しないという状態は、一九三〇年代の国際連盟を思わせる。当時、各国は自国の都合で戦争を行ったり準備したりしており、国際社会の一致した意思がどこにあるのかははっきりしなかった。その行き着いた先が、第二次世界大戦である。この戦争が収拾できたのは、アメ

よ、アメリカに替わって世界平和を維持する役割を果たせない以上、最後のところではアメリカに依存せざるをえない。

アメリカの民主主義は、安全保障への敏感な感覚と結びついている。それに対して、日本の民主主義は、そこが鈍感である。今回のイラク戦争で、日本国民は、戦争を不可避としたアメリカの動機を理解しなかった。小泉政権は、イラク攻撃の正当性と日米同盟の重要性を、国民にきちんと説明できなかった。変化する国際社会に、認識が追いついていかない。一九三〇年代の過ちを繰り返さないようにしなければならない。

# 私は「教育」からどう考える

ここに教育についての一つの意見を提示したい。  
きみはここから何を考えるか。自分の意見を引き出してみよう。

まず、なぜ勉強するかについてお話しします。

勉強は時間とエネルギー、注意力、集中力を使って、情報を将来生きるために自分の体の中に変換しているんです。今は情報化時代で、情報は膨大に図書館やネットワークなどさまざまなところにあります。本当に大切なのは自分の頭の中にとれだけの情報があるか。自分の頭の中に入りにくいといけません。もともと頭の中に情報がある人にはかまいません。だから、基本的なことを正確に、頭の中に入れて自分のものにし

ておくことが大切なのです。それが普通教育なんです。たとえば、「四面楚歌」を学校で習いますよね。分らないければ辞書を引けばいいというのでは意味がなくて、使い方や意味が自分の頭の中に入っていないのはじめての意味があるのです。だから、高校までは誰もが頭の中に入れておいて損をしますよ。

入れているものは自分だけの特別メニューです。みんなが勉強しないことを、自分で勉強しておけば得をします。それも大事。損をしないで得をすれば

幸せになれます。人と違うこと

によってみんな得をしているのですから、世の中助け合いです。みんな違うことをやっているから社会が成り立っているんですよ。自分の得意を伸ばすのは競争ではありません。みんなが幸せになる方法論なんです。ただ今の教育は、それがなかなかうまくいかない。高校時代が終わり、それから先みんな違うことをやる段階になって逆に自分の方向を見失い、切り替えができません。困ることが多いのです。そうならないためには、普段から人と違うことにプライドを持つことが大切です。自分は友だちと違ったところがいく

つあるか数えてみる。もしなければ、自分独自の勉強や経験から作ればいい。なんでも、やろうとする気持ちが大切です。

学ぶためには人間がどうやって生きていくかの一生のイメージが大切です。イメージがわけば、学ぶ目的や内容が見えてくるからです。でも、どうやって生きて死んだのかは一生を完結した人にしか語れませんから、結論から逆算して人生を生きるのには不可能です。だからこそ、自分の将来を最大限想像して見るのです。30歳になった私を想像して、できれば対話をしてみるのです。想像上の私と対話ができるようになれば、家

族と関係が作りやすくなります。周囲にいるおじいさん、おばさん、いとこがもう一人の自分で、自分に代わってもうひとつの人生を生きてくれます。その姿からいろいろな情報を得て、

自分のこととして考えることができます。ただ経験は、経験した範囲でしかないので非常に狭いし浅い。それを補うのが学校教育で、学校で教えてくれる学問は実は、経験を時間的・空間

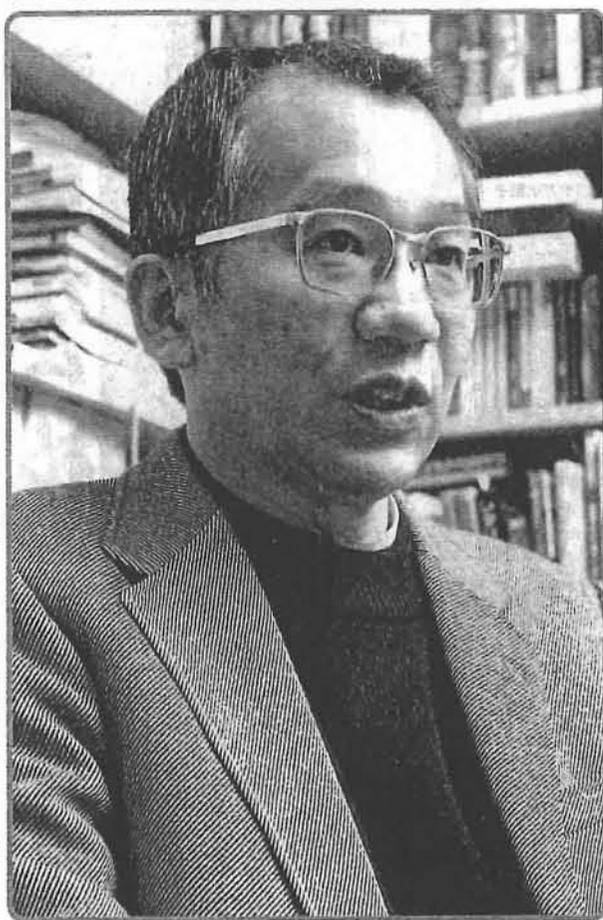
的に広げてくれるのです。学校の勉強は、自分の経験とつながらないからつまらないというのが中学生・高校生の考え方もありませんが、実は大つながりなんです。そう思った方が得。

そして早くわかった方が得です。早くわかれば目標ができるし、学ぶ意欲も生まれます。あなたが今学んでいることには、全て大きな意味があり、あなたの将来につながるものなのです。

## 橋爪大三郎

【はしつめだいたいさぶろう】

1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。『選択・責任・連帯の教育改革 完全版』『言語派社会学の原理』など、著書多数。最新刊として、『心』はあるのか——シリーズ「人間学」①「教育問題から政治、経済、国際問題にいたるまで、さまざまな分野にわたる見解を発信している。



テーマへのアプローチ

「考える人」の意見を聞く

### 「考えの履歴書」

親から「自分だけが理由もなく特別扱いをされるのは間違いだ」ということを教わったことが、私の教育を考える原点です。実際に通った公立の小学校にはさまざまな家庭環境の人がいました。みんなが違うことが当たり前を感じられました。今は社会的な背景が同じになっている分、人と違うことが苦しい世の中になっています。また「パラサイト・シングル」のように自分で努力をしないでも、何でも与えられる世の中になっています。学校にいてみんながやるのだったら自分もやる、みんなが食べるのだったら自分も食べなければなりません。これが「自分だけが理由もなく特別扱いされるのは間違いだ」ということです。道徳性の基本です。これを身につけるのも学校教育です。この基本を身につけたうえで、つぎに、自分だけのオリジナルなことをやってみる。この順番がとても大切なことです。これが逆になると、単なる「わがまま」が育つだけです。

\* 「パラサイト・シングル」…学業を終え、場合によっては就職してからも親と同居し、経済的に依存している未婚の成人のこと。(「イミダス」より)



分

# 橋爪 大

文化や社会の  
不完全性を認める。そ  
いま、求め

写真:アリア・ティアスボウ

人間社会における嗜好とは、  
どのような存在意義があるのだろうか？  
一見不必要に見えるこの人間固有の文化は  
人間らしさとして認めるべきだと橋爪氏は言う。  
氏の提言は愚行権から文化同一性、  
日本の大人の生き方にまで及んだ。

# 動

物だつて時として、生命の維持に関係のない行動をとる。まして人間は、その傾向が顕著なんです。……たとえば、言語「あつ、危ない！」と思わず叫んで生命が救われる場合を除けば、私達の会話の大部分は、生命の維持と無縁の余計な(?)言葉のやりとりで成立しています。実はそこが人間を人間たらしめているゆえんでもある。

食べ物だつて同じことです。生命維持のために栄養を摂取するというよりも、むしろ料理して、味や見た目、食事の雰囲気そのものを楽しむものとなっています。衣服にしても、寒さや風から身を守るといった実用性よりは、身分の表示や流行といった表現に重点がある。住宅だつて、雨露をしのぐという以上に、ライフスタイルの象徴になつてしまつていくでしょう。

このように、生きていく必要を離れた象徴化にこそ、「人間らしさ」の根源がある。そしてこれが、文化の源でもある。こうした人間の領域が、社会学や哲学、歴史学、そして美術や音楽、文学などの芸術のテーマともなつてきました。

なかでも「嗜好」というものは、生活における必要性では説明できないもの

生きていく必要を  
離れた象徴化にこそ、  
「人間らしさ」の根源がある。  
そしてこれが、  
文化の源でもある。

の代表で、その意味では、これほど人間的な行為もないと言えるでしょう。

愚かな行為は、  
本当に愚かなのか？

そもそも、生命の維持に関係がなく、むしろ生命に危険を及ぼすような行動は、他者から見れば、なんとも愚かな行為でしょう。にもかかわらず、あえてそれを行なう権利が個人にある、という考え方を、「愚行権」(idiot's right)という考え方を、「愚行権」(idiot's right)と言います。なんでもなんでも「権利」というと、みんなが「愚か」と思ふ行為が、ほんとうに「愚か」なのかというところ、そうとは限らないからです。たとえば、ふつうの生活のなかでは、躊躇されるような行為でも、状況によっては、勇気や信念がある証しとして賞賛されたりする。「愚か」なのは、単にそれが失敗した場合の結果論でしかなくて、たまたま成功すれば、逆に名譽を手に入れるかもしれない。

戦争や危機のさなかには、あえて危険な状況に身を投じたり、先頭をきつて敵陣に飛び込んだりして、社会を統率する強力なリーダーが求められるわけですから、そこで、自発的にそういうこ

どを行なう人間が出てくる。こういう行為は、生命の安全や仕事の合理性からだけでは説明がつかないが、とても人間的な行為のひとつではないでしょうか。

愚行権の発生は、食用には適さない動物物を食べたり、飲んだり、燃やした煙を吸引したりといった、非常的な行為に宗教的な意味を見いだしている。大昔からの伝統が背景になつている。そうした行為には、集団の結束を促すなどの社会的な役割があったのだと思います。食用にならないものを食べたり、煎じて飲んだりする「勇気」ある行動は、集団の中で体験を共有する場、連帯を生み出す機会を創出することになった。それが宗教や政治制度のなかで、儀式に定着していったわけですから、習慣化して、「嗜好」に転じることにもなつた。

グローバリゼーションの  
ギャップをどう埋める？

以上のようなプロセスで、文化へと昇華を遂げた習慣は、やがて他の文化圏にも伝播していきます。このようにして世界中に伝播したものの代表は、お茶やタバコやアルコールでしょう。

こうして「本来なかったものを持ち込まれた」側では、その扱いに困惑することになります。これは嗜好品に限らず、料理や日用品などでも、それが生まれた国や地域ではごくありふれたものであつても、伝播した先の国では高級文化と考えられたり、個人の嗜みとして扱われたりするケースが多いのです。日本でもつい最近まで、外国産タバコや外車が、特別な意味を持っていたでしょう。そんなもので見栄がはれるのは、「外国のテイストが理解できる自分ほえらい」という、優越感を満たさせることができるからです。

グローバル化の進展とともに、どの国家も、社会も集団も、互いの文化がますます急激に相互浸透するようになりま

りました。そして、「グローバル・スタンダードこそがよいもの」という価値観が広まり、ハンバーガーやジーンズ、コーラが世界を席捲。その代わりに、世界各地の固有文化が、相対的に価値を下落させています。

これに対する人びとの反応は、大きくふたつに分かれます。ひとつは、明治日本の「脱亜入欧」「文明開化」と同じ論理、外国産タバコや外車をありがたがるという態度です。

もうひとつは、「世界に引きずられる

のは面白くない」と考え、自らの個別文化を尊重しようとする動きです。これは、外庄の軋轢の中で、ナシヨナリズムや国粋主義に向かうベクトルになる。かつて「昭和維新」を掲げて決起した皇道派青年将校や、イスラム主義復興を唱える人びとに、そうした動きを見ることができま

この世に私は一人だけ

ところで人間には、「他者が評価しないこと」がらに価値を見いだすことで、自己の優位を確認する」という習性もあります。いわゆる「こだわり」などがこれにあたる。なぜこういう変な現象が起こるか。

人間の社会は基本的に、「私もあなたも同じ人間」という前提で、できています。しかし人間は、工業製品ではないから、ほんとうは一人ひとり違つている。そこで、人間はみな同じということを強要する社会への反撥として、「私」という存在は、この世でたった一人だけ」という感覚、つまり、自分の特異性を主張したいという欲求が高まつてくるのです。

「私は、みなと違つた、特別な存在だ」と言うには、どうしたらいいか。その

外国産のタバコやクルマで  
見栄をはれるのは  
「外国のテイストが  
理解できる自分は偉い」  
という優越感と満足さ  
せられるからだ。

証拠に、「他人には理解できない私だけの世界」を持つことができればいい。牛乳瓶の蓋や、マッチのラベル、食料品のパッケージなど、まるでガラクタみたいなものを蒐集する人がよくいるでしょう。その背景には「他人には理解できないかもしれないが、私にはその価値が理解できるんだぞ」という意識がある。

この手のコレクションは、他人に迷惑をかけるわけでもないし、それ自体どうということはありません。でも、その興味の対象「自分だけの世界」が、麻薬や薬物に向かったりしたら、反社会的になる。結果として本人を傷つけて周囲にも迷惑を及ぼす結果をまねいてしまいます。かと思えば、「自分にしか理解できない価値の世界」が、他人にも理解できるかたちになり、みなで楽しめる共有財産になる場合もある。芸術が、これに当たります。こういう自分の特異性(個性)の確認の仕方は、大歓迎なわけです。

国際社会の中に自国を  
位置づける視座の欠落

さて、グローバル化への反作用は、世界の大勢とギャップを広げてしま

という意味で、混乱や貧困の源ともなりかねません。

実際には、グローバル化への反作用は、グローバル化と一体不可分なものである。「マクドナルドは好きだけど、アメリカは嫌い」なのです。そこで、グローバル化と反グローバル化のなかに、た粹組みのなかに位置づけていく姿勢が大切です。

そもそも日本社会は、歴史的に、グローバル化との折り合いのつけ方が下手くそだったのではないのでしょうか？

一五四三年にポルトガル船が種子島に漂着し、日本に鉄砲の技術がもたらされた。これが、それまでの戦術の大転換をうながし、戦国時代を終わらせたのです。すると、国際情勢にうとい日本人は、海外に領土拡大の野心を広げた。豊臣秀吉は、東アジア一帯に大帝国を築こうと、二度にわたって朝鮮に兵を送り、大失敗に終わる。また、鉄砲とほぼ同時期に入ってきたキリスト教は、さまざまな「南蛮文化」を開花させましたが、神の下の平等を説くその教義が封建道徳に背することもあって、やがて弾圧され、日本は鎖国の時代に入ります。

ところが今度は、数百年たつと、欧

米列強の外圧に、再度開国を迫られる。日本は、無菌状態のなかで固有文化を育ててきたあいだに、世界から大きく遅れてしまったことを痛感します。そこで明治維新を起こして、今度は、西洋文明の吸収に全力投球し始めた。そして、ある程度力をつけると、今度はもう一度日本主義への揺れ戻しが始まり、欧米列強に対抗してアジアの盟主とならねばならないと、戦争に突入してきました。そして大敗北を喫した後、

アメリカを基準とした世界観の下で、日本は驚異的な経済復興を遂げます。一九八〇年代には、その経済力を背景に、世界の中心の地位を手に入れたように見えました。しかし、バブル経済が崩壊してからは、今度はグローバルゼーションの波の中で、構造改革を旗印にしなければならなくなっている。

このように、定見も自信も欠いたまま、世界情勢の荒波の中でただ右往左往してきたというのが、近代日本の姿だったと言ってもよい。

いま、日本の大人達は如何にして生きるべきか

それでは、このような歴史を認識し、反省した日本の大人達は、どのような

スタンスであればよいのでしょうか？

実際、文学、思想、哲学、芸術、政治など、どの分野でも、国際社会と共同し協調しながら、日本独自の文化的アイデンティティを主張するのは、難しいものです。

この点から見ると、岡本太郎氏は、稀有な存在かもしれない。彼は、一九三〇年代に留学したパリで、シュールレアリスト達と交流を深め、帰国してからは過酷な軍隊生活を体験。世界標準と個別文化のあいだで苦しみながら、生命力を表現する彼一流の作風を築いていったのです。岡本が表現する生命力は、日本神話にさかのぼるものとも言え、国際化によって触発されたその創造性は、高度成長に向かう日本社会を象徴するものとして、大きく開花していききました。

文学の世界では、国際社会を十分に意識しながら、日本の個別文化に根ざした個人的な世界を開花させた存在として、三島由紀夫や村上春樹を挙げることができるといえる。

でも、こうした幸運な表現者たちは、言わば例外です。そうではない、私たちふつうの日本人が心がけるべき生き方は、どんなものか。私たちの文化や社会の、分裂を分裂として許容し、不

完全を不完全として認める。それが、「分」なのではないのでしょうか？

「分」なのではないのでしょうか？

そのためには、ものごとを一面的に決めつけるのではなく、別の側面や見方があることを理解し、認める姿勢が重要になります。このようなバランス感覚は、「聞き分けのよさ」につながります。「聞き分けがよい」と、あくまでも自己の価値観を主張するといったパワーは、多少、鈍るかもしれない。それでも、「これでよいのか？」と思いつつも、現状を見つめ直し、「分」について考え始める時代になったと言えます。

橋爪 大三郎【はしづめ だいさぶろう】  
東京工業大学教授。1948年、神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程単位取得。主な研究分野は、理論社会学、宗教社会学、現代アジア研究、現代社会論など。最近の著書に、「日本人は宗教と戦争をどう考えるか」(共著、朝日新聞社)「その先の日本国へPostwar Japan and Beyond」(勁草書房)などがある。



# 橋爪大三郎

橋爪大三郎  
東京工業大学教授。東京工業大学大学院 社会理工学研究科 価値システム専攻。1948年、神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程単位取得。主な研究分野は、理論社会学、宗教社会学、現代アジア研究、現代社会論など。最近の著書に、「日本人は宗教と戦争をどう考えるか」(共著、朝日新聞社)「その先の日本国へ Postwar Japan and Beyond」(勁草書房)などがある。

現代社会を分析する

シリーズ  
嗜好の  
社会学

「嗜好は愚行？ 不必要な

ことをするのが人間性であり、文化である」

生きていくのに必要のないこ

ともするのが人間。その個性が社会とぶつかった反作用が、趣味や嗜好、文化です。個別文化主義も、グローバル化の反作用として起こっている。ふつうの日本人は、国際社会の経験や、自信がない。日本の文化的アイデンティティを主張できずに、

これでいいやと居直って自分の人生を良しとする。でも、他者や世界に対する関心を忘れてはいけない。この両面的な感覚がある、理解力が高くなるが、

自分流の価値を主張するパワーは弱まる。「これで良いのか」という思いがまさに「分」の精神でしょう。

2003.6.25

# シネオテラ

進むべき道を示せず

こう分析した「写真」  
官庁が大きな権限を  
握り政治家の立案能力  
が低いため、あるはず  
の政権交代がない、と

量もない首相を、野党  
と無党派が支えてい  
る。ポーズだけの首相  
に、合理的な手段を  
に改革の中身を求めな  
い国民にも責任があ  
る。東工大大学院の  
橋爪大三郎教授（社会  
学）は二十四日、諏訪  
市での信毎セミナーで  
「各国が自分の様式  
で動き始めたのに、日  
本の進むべき道を誰も  
示していない」。政治  
経済の危機を乗り越え  
るために  
は、独自に  
情報分析  
し判断する  
必要がある  
と訴えた。



橋爪大三郎教授

## 「ならず者国家」に効き目なし



はしづめだいさぶろう  
橋爪大三郎  
東京工業大学教授

核武装を、日本人が現実の問題として議論するようになった。冷戦が完全に過去のものになったということだ。  
冷戦の当時、こうした議論は、非現実的だった。

冷戦の構造について、復習しておこう。米ソの両核大国が、大量の核弾頭つきミサイル（ICBM）で、互いを狙っていた。不意の先制核攻撃を受けても、残った核兵器で、相手国を完全に破壊できる。相互確証破壊（MAD）の戦略が、核戦争を抑止

していた。  
米ソ以外の各国は、両陣営のどちらかに属し、核の傘によって守られた。そうした国々は、万一核兵器で攻撃されたら、確実に核で反撃してもらえると期待できた。英仏、中国など一部の国を除けば、核武装する能力も動機も存在しなかった。

通常兵器による侵攻は、核兵器によって反撃される可能性が高いこと。そして、核の先制使用は、確実に反撃を喰らうこと。要するに、核兵器は使えない兵器だとい

ことが、冷戦の帰結だった。

冷戦が終わり、世界は、アメリカの一極支配に移行した。ソ連の代わりに、アメリカの敵として登場したのが、北朝鮮のような「ならず者国家」である。こうした国が核武装したらどうなるか。

「ならず者国家」の核兵器は、テロリストの手に渡る可能性がある。テロリストは、国土を持たず人民に対する責任もないので、報復を恐れない。「ならず者国家」も、人民のことなど意に介さない独裁政権なので、冒険主義的行動をためらわない。いずれにせよ、核抑止力が効かない。つまり核兵器は、いまや使える兵器なのである。

核兵器は、通常兵力を営々と維持するのに比べれば、安上がりである（費用・対効果が高い）。そこで、隣国が核武装するなら、自国も核武装することは合理的である。インドとパキスタンは、このように核武装をしてにらみあい、二〇〇二年の春は一触即発の状態にまでなった。

北朝鮮が核武装して、日本の脅威となった。日本が核攻撃を受けた場合、アメリカが確実に核で反撃してくれるかど

うかが、まず疑問である。その結果、核弾頭を搭載した北朝鮮のテポドンが、カリフォルニア州あたりに飛んでくるのは、アメリカの悪夢だろう。第二に、アメリカが核で反撃するかも予想したぐらいで、北朝鮮は核の先制使用をためらわないかもしれ

ない。そう思わせておくぐらいでない、この国はもたない。

それでは、北朝鮮の核の脅威に対抗して、日本も核武装すべきなのか。日本が核をもったとしても、先制使用するわけではない。核攻撃を受けたときの反撃、すなわち抑止力としてであろう。けれども、北朝鮮に対して、抑止の効果があるか疑わしい。日本が核兵器をもったとしても、北朝鮮は、核兵器の先制使用をためらわない可能性が高いし、それなら、核兵器をもつ意味がない。日本と北朝鮮の間に「冷戦」は成り立たないのである。

北朝鮮の核の脅威に対抗するなら、核兵器よりも、MD（ミサイル防衛）や、攻撃的な通常兵器（長距離爆撃機や巡航ミサイル）の配備のほうが、まだしも効果がある。核兵器による報復は、アメリカに任

せておくのがよい。通常兵器は、状況に応じて、先制攻撃に使われるかもしれないと北朝鮮が考え、抑止力になるからである。  
アメリカは、小型の戦術核弾頭の開発を急いでいる。戦略核兵器は、民間人に多くの犠牲が出るため、先制使用ができない兵器なので、「ならず者国家」に対して抑止力にならない。目標を個別に破壊できる小型の核兵器を配備して、「圧力」を強めようとするのは当然だ。アメリカは、核抑止力を取り戻そうと、やる気をみせている。

日本の核武装は、中国の警戒をうむだろうし、アメリカとの同盟関係も変質する。予測のむずかしい複雑な連立方程式を解かないと、日本にとってプラスであるとは言えないだろう。それなのに、反米ナショナリズムに浮かされて核武装を語るのには、無責任極まりない。いまは、北朝鮮の核武装を阻止するための、アメリカをはじめとする国際的な共同作業に、あらゆる手だてを尽くして協力することが、なにより大切だ。